思う

億単位の金がかかるが、今世紀中に

「中日大辞典は十三年の歳月をかけて一九六八年に初版を出し、五万冊を発行。一九八七年に増訂版を印刷し、二年ごとに一万冊の増刷を続け現在約八万冊になります。増訂版は本文が二千五百二十ページ、十四万三千語を収録していますが、増刷ごとにミスや表現に工夫するなど手直ししています。これまでの十三万冊のうち初版千二百冊は、尽力頂いた故郭沫若中国科学院院長に贈りました。ちょうど長崎国旗事件など日本に関心が高まった時期で、中国各地の日本語に関係した研究所などで評判がよく対日関係者は皆知っています。増訂版も四千冊贈りました。一時は海賊版も出るほどで、敦煌の研究所でもこの版を使っています」

「九六年に大学が創立五十周年を迎えるので、この夏、記念事業として全面改訂することにしました。この大学は戦前、上海にあった東亜同文書院大学の学長、本間喜一さんら同大教授、学生が集まり作ったもので、東亜同文書院時代の一九三二年に辞書編纂の機運が広がり、約十五万枚カードに七万語が採集されていました。戦後、国民党の国立翻訳館に木箱四、五個に入って保存されているのが分かり、郭沫若さんらの協力でこの大学に贈呈されました」

「しかし、新政権後は国民党時代の言葉が排除され、文字の形、内容、意味、発音記号などが一変、使い物にならなかった。幸い四六年から中国と交流があり、新中国の新聞、月刊などの雑誌、学術論文集を資料に片っぱしから語彙を採取。数十万枚のカードから十一万語を約二千ページに収録したのが初版でした。文化大革命後、簡化字が第二簡化字になり八千八百字と四倍に増え、増訂版にしました。語彙も三万語増えています」

「辞典作りは金食い虫で、金がものすごくかかる。初版の時も『いいことかもしれんが、金がかかり過ぎ』と猛反対があったほど。略字作るのに一本一万円もします。それが一万字もあるのですから。しかし、出版社の好意でなんとか出せました。今回は全面改訂するので、億単位の金がかかると思います。また、最近は中国でも復古調が目立ち同文書院時代のカードも役立ちそうです」

「大学卒業の時に『職なかったら残らんか』と言われ、初版から辞典作りしてきましたが、中国の日本語教育学会には五、六百人のメンバーがあり評判が良く、中国へおみやげに持って行く人も多い。大学には毎年、中国から十人余の研究者が来校し、五、六十人見える代表団には一冊ずつプレゼントしています。日本でもここ数年やっと辞典を使って中国語を学ぶ時代になりました。この辞典は研究者用なので、初学者向けや発音辞典も出したい。大学は四年後に、と言っていますが、専任四人ですから今世紀中に出せれば。でも、元気で最後までやれるかどうか。大学院に研究者がおり、後継者は育つ

と思っていますが」

今泉　潤太郎さん

いまいずみ　じゅんたろう

一九三二年豊橋市生まれ。愛知大学文学部中国文学専攻卒。五十五年から同大華日辞典編纂処嘱託、教養部助手、講師、助教授を経て七十六年から教授。辞典のほか著書に「21世紀への日中関係」「中国語簡化漢字要覧等」「中文会話教科書」。

（聞き書き・星出　敏男）

〔注〕毎日新聞（一九九五年十二月二二日　家庭面）　所載。

前略

先般は御多用中の折、取材に応じていただきありがとう御座居ました。

その後、中日大辞典について、今泉教授に取材、家庭面に掲載しましたが、読者から同封の手紙が届きました。

皆様の励みになればとお送りします。

今泉先生にも宜敷くお伝え下さい。

石井様

平成七年一月十一日

星　出

前略

十二月二十二日の朝刊に「中日大辞典」に関する記事があり思わず筆をとりました。

私は現在二十九才の子育てに忙しい主婦です。一九八三年に群馬県高崎市に開校された新島学園女子短期大学国際文化学科・中国語文化圏コースに一九八四年に第二回生として入学しました。開校二年目のほとんど無名の学校で中国語文化圏コースの学生は確か四〇名で私は期待より不安と絶望に近いものを持っての入学でしたが、何と中国語だけで週に十時間（単位）はあり、その他中国語文化圏の文化や歴史を学び、ご指導下さる先生方にも恵まれ学ぶにつれ中国語が面白くなって来ました。

そして入学して一ヶ月ほどして中国語の辞書の使い方を教授され、その時に勧められた辞書のひとつに「中日大辞典」がありました。

私はどうせ手に入れるならとその辞典を探して何軒かの書店を歩きましたが、県内で一番大きいと言われる所ですら無く、結局某有名書店でとり寄せてもらう事となり、二週間ほどで入荷したと言う連絡を受けた時は、すっかり有頂天でこれで中国語はマスタ

ーできるなどとうぬぼれたものでした。そして、「見つかって良かったですね、この本はどちらで紹介されたのですか」『愛知大学中日大辞典編纂所』という聞きなれない出所にきっと、とり寄せるのに苦労されたであろう店長も喜んでくれたのを印象に残っています。

初心者の私には少しぜいたくな買い物だったかもしれません。他の中日辞典より価格も高く、毎日持ち歩くのには重かったかもしれません。しかしその辞典はいつも私と共にいて、毎日の中国語の学習になくてはならないものとして在りました。

無名の短大で中国語を勉強していると人に言うと、好奇と冷笑の視線を受けましたが、私も多くの友人も中国語を楽しんで喜んで学び、充実した二年間を過したと思えます。

今でも友人たちの中には中国語の学習を続けている者、父親の工場で働く中国や台湾からの研修生たちのために役立てている者、後輩の中には留学してそのまま大陸で仕事に就いた者もいると聞きます。

友人のひとりは卒業してから「中日大辞典」を購入したと言っておりました。

私は記事を読みあの毎日辞典を片手に、読み方、四声、意味を調べた学生時代を、友人のために難しい字を引いたあの少し優越感を持った時を、懐しい先生方、友だち、を思い出しました。そして何よりあの辞典には「大辞典」と言われるだけの歴史と価値がある事、今でも作り続けられている生きたものであると知り、感動にうち震えています。

先日、友人から中国語を勉強してみたいと言われ、確かに中国語を学ぶ人も増えて来た、辞書をはじめ、中国語関係の書籍が見られる様になり、喜ばしい事だと思います。

私は「中日大辞典」の発行数の少なさと「研究者向け」とあったのに驚かされました。初心者の私には辞典を引いて決してがっかりさせられる事の無いものだったからです。ですから願わくば「研究者用」などと言わずに中国語を学ぶひとりでも多くの人が出合える事を活用される事を思わずにいられません。

そして何よりこれからもこの「大辞典」が発行され、改訂編纂の作業が続いて守られます様に祈らずにいられません。

まとまらない私事ばかりでしたが、記事を読み本当にうれしくなりました。感謝いたします。

そして何より愛知大学の先生方のご活躍を期待いたします。

かしこ

一九九四年十二月二十二日

阿部尚子

〔注〕前掲の記事を読んだ一読者から新聞社に寄せられた手紙。石井学長に転送されたもの。

第3版の出版に向けて

今泉潤太郎（『中日大辞典』前編集委員長）
インタビュアー　安部　悟（愛知大学現代中国学部助教授）

■第三版の出版に向けて

安部　八六年に増訂版が出版され、翌年の八七年には増訂第二版がまたすぐに出版されるわけですが、この間の事情は、先生が書かれた「増訂版の補訂に当って」でも簡単に触れられてはいるのですが、事情を知らない方にも、今のお話でなぜ第二版を出さざるを得なかったかのということがよく理解できたのではないかと思います。こうして出版された増訂第二版も好評で、初版に劣らぬ売れ行きを見せたようですが、その増訂第二版も出版からすでに一五年以上の年月が経ち、時代の変化や要求に対応できなくなってきており、第三版の出版が強く求められるようになりました。こうしたニーズにあわせて、また辞典編纂所の移転とそれに伴った新体制への改組などを経て、これまで少しずつ準備を進めてきた新版出版のための編集作業を本格化させ、愛知大学の戦略的事業項目のひとつとして、第三版の刊行に全力を注ぐことになったわけです。新体制では、中日大辞典編纂所の所長および編集委員長は私が務めさせていただくことになり、先生には編集主幹として引き続き第三版の編集に携わっていただくことになっております。編集主幹のお立場から、第三版出版に向けての抱負をお話しいただければと思います。

今泉　第三版は新しく成立した中日大辞典編纂所での編集となります。編纂所の新体制は安部先生が所長で、現代中国学部の教員を始めとして、名古屋、豊橋両校舎の中国語教員あるいは中国関係の各分野の教員が所員となり、スタッフは飛躍的に増強されたと思います。また編集も、初版の時の編集形態に戻り、中国語専任の先生方が編集委員、それから中国関係各分野の先生方が編集協力委員という体制で行います。

　内容的には先ほど言ったような点が主となりますが、ボリュームを増やすことなくいかに充実させるかということになると思います。第三版は当然初版、増訂版、増訂第二版と続いた基本的な性格をさらに徹底するということになると思います。

　それから中国ではその後もさらに辞書編集に関するいくつかの政策的な決定がなされています。例えば、漢字の部首の数をいくつにするとか、どういう形の部首を残すとか、あるいは辞典の約物といいましょうか、記号類、符号類ですね、こういう場合にはこういう矢印を使うとか、そこまで中国は次々に決めてきています。『現代漢語詞典』の二〇〇二年版はそれに従って編集されています。こういったものを第三版に取り入れるかどうかは、最終的に編集委員会で決定されておりませんが、中国でいうところの現

代漢語をできるだけ正確に反映させた辞典にするという基本の考え方は変わりません。例えば香港や台湾の語彙は港台という括り方で方言として入れることも考えております。いずれにしても、従来の基本的な性格を生かして現代の需要に合わせるという点では、愛知大学の『中日大辞典』ということで一貫させたいと思います。

それから増訂版が出た過程でＣＤ-ＲＯＭなど、電子版の話もありましたが、これについては編纂委員会で一定の方針が立てられるだろうと思います。私の今の仕事は、『中日大辞典』第三版の編集を責任もってやることですし、残された時間も多くはないので、できる限りこれに集中したいと思います。

『中日大辞典』は、初版以来多くの利用者の支持があって今日まで存在していますが、とりわけ今度の第三版の出版に関しては、非常に熱心に支えてくれる東亜同文書院や愛知大学の卒業生の方々がおられます。特に松山昭二氏は、『中日大辞典』所収の語彙が、人民日報などで今どのように使われているかという情報を、長年にわたり多くのカードにして送って下さっています。その他いろいろな方々の協力もありますので、現在の需要に応えられる新しい第三版をできるだけ早く完成させたいと思っています。『中日大辞典』の編集は、愛知大学創立一〇周年記念事業として始まりましたし、節目ということで言えば、第三版の出版が六〇周年記念に間に合えば、これは願ってもないことだと思います。ただ、それは大変厳しいですけれどもね。

安部　私自身、外大の中国語科に入学したのが七四年で、その時に購入したのが『中日大辞典』の初版本だったのをよく覚えています。それ以来の愛用者ですし、この辞書の恩恵を大いに被った一人です。今は逆に、それを出版する側に身を置くことになったのも、きっと〝有縁分〟（縁がある）からなのだろうと思います。前回増訂第二版の出版には参加できませんでしたが、今回は第三版の出版に向け、これまで鈴木先生や今泉先生がやってこられた仕事とその思いを引き継ぎ、微力ではありますが鋭意努力したいと思っております。第三版を、従来の特徴は残しつつも可能な限り現在のニーズに合わせたより充実したものにし、これまでこの『中日大辞典』を利用してくださった多くの方々や、第三版の出版を心待ちにしておられる方々のためにも、一日も早く出版したいと考えております。本日は長時間にわたり、『中日大辞典』に纏わるさまざまなお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございました。

（二〇〇三年六月二日）

〔注〕『中国２１』Vol.18（二〇〇四年三月二〇日）所載。『中日大辞典と私』より抜粋。

中日大辞典的编纂经过

今泉 润太郎

下面介绍同文书院编写华日辞典的经过。

在 1933 年前后，同文书院华语研究会一该校汉语教研室一决定编写华日辞典的计划。

在中国历来的学者中有重文言、轻口语的习惯。因此，中国学者对当代汉语的研究是不足的，关心也很低。

中国出色的辞书《辞源》在 1915 年问世。但这是以文言为对象的辞书。作为汉语口语辞典最早的大概要周铭三编《国语大辞典》（不到三百页的小型辞书）问世于 1922 年，《王云五大辞典》是 1930 年，真正的汉语辞书《国语辞典》（中国大辞典编纂处编）第 1 分册的问世已是 1936 年。

汉语辞书（内容是汉日词典）的出版莫如说日本更早。在 1910 年代初期就已有石山福治编《中国语辞典》了。其后，1928 年《井上中国语辞典》问世。但这些都就连学生使用起来都觉得不满意的。

这样情况下，原来的同文书院平时有十几名中日两国汉语老师，有能力编写出汉语辞书，也感到有其责任。编写华日辞典工作由铃木择郎教授指导。当初的编写方针是：以《井上华语辞典》为起点，补充必要的词汇，编写出能够适应现实需要的汉语辞书。

编写业务都是由全体人员利用教学以外的时间进行的。败战后，被作为敌产由中华民国政府接收时，原稿卡片约有 14 万张，词汇数有 7，8 万条。

新中国成立后，1953 年爱知大学本间喜一校长（原同文书院大学校长）跟铃木教授热心说要回辞典原稿卡片。铃木想起在交原稿卡片时，对接收委员郑振铎先生口头提出的愿望：等条件允许时，我们想用我们的双手完成这本辞典。

以此，本间试探性地提出了请求。请求信委托日本中国友好协会内山完造理事长送交中国科学院郭沫若院长。结果，遵照“为了中日文化交流，将原稿再赠送日本人民　”这一宗旨，1954 年，中国人民保卫世界和平委员会刘贯一秘书长托付回国船兴安号送来了原稿卡片。接收单位日中友好协会召集了原有关人员进行协商，最后决定委托原有关人员多，并对完成这个有意义的历史性的事业抱有热情的爱知大学。

这样，1955 年爱知大学创设华日辞典编纂处就开始编写工作。那年在爱知大学刚毕业的我本人能有机会参加这个工作。以后我直到现在从事着编写工作来的。

1967 年，用了 12 年的时间，从同文书院开始编写的时期来算够 34 年，才能出版了《中日大辞典》。

在编写期间，中国方面给予我们很多支持。1956 年，我们收到了由中国人民对外友好协会赠送的《同音字典》、《中国语文》等其他资料。1955 年，中国学术考察团冯乃超副团长、1958 年，中国法律家代表团韩幽桐团长等访问我校并给予我们鼓励。1966 年，郭沫若先生还写给我们“激浊扬清”四字给予我们鼓励。

这《中日大辞典》是从中国送到日本、从同文书院继承到爱知大学而完成的辞书。它是中日学术合作的一个模特儿。

我相信《中日大辞典》是不但作为一个有价值、有意义的工具书，还作为中日友好的船、文化交流的桥。1986 年出版了第二版，正在进行要明年秋天出版的第三版印刷工作。

〔注〕日中研究者による東亜同文書院研究シンポジュウム（2007 年 7 月 28 日、愛知大学記念会館）における報告の抜粋。